平成ごみ事情

限りある資源を再利用しなければ…

わたしたちのまわりには、たくさんのモノがあふれています。きれいなモノ、かわいいモノ、手軽で便利なモノなど次々と新しいモノが増え、生活は楽しく、豊かになりました。しかし、同時に、日々たくさんのごみが発生し処分され続けていることも忘れてはいけません。そしてごみの処理にはわたしたちの大切な税金が使われています。大量生産、大量消費が経済を潤す一方で、モノが大量に廃棄され、増え続けるごみの山。限りある資源を生かすため、使い捨てから再利用への転換が、今、求められています。ごみを捨てるということは、地球の大切な資源を捨てること。限りある資源を大切にするために、わたしたちにできることは何か――。ごみの現場を取材しました。

これが焼却場の現状です!!

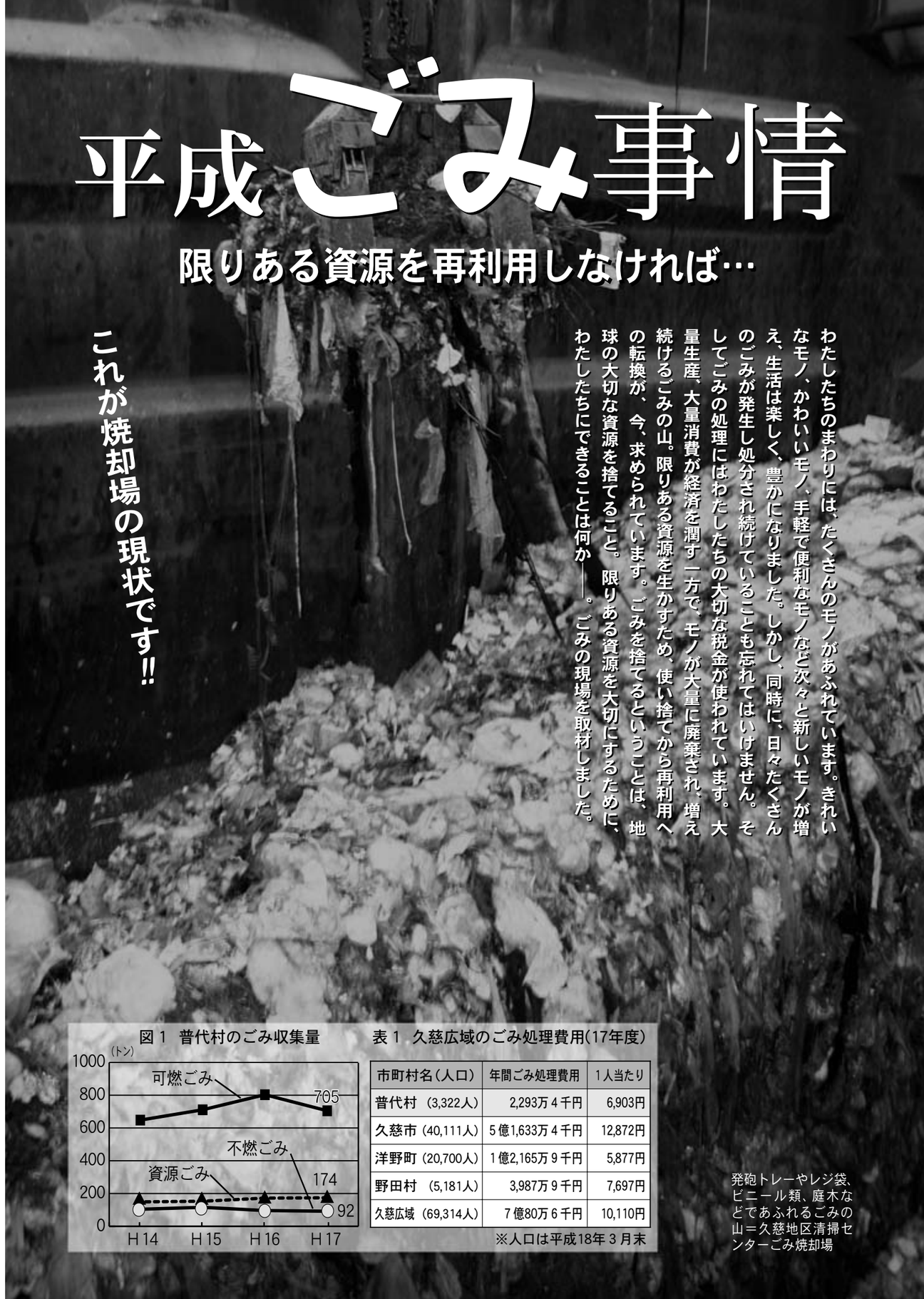

図1 普代村のごみ収集量

表1 久慈広域のごみ処理費用(17年度)

市町村名(人口)	年間ごみ処理費用	1人当たり
普代村 (3,322人)	2,293万4千円	6,903円
久慈市 (40,111人)	5億1,633万4千円	12,872円
洋野町 (20,700人)	1億2,165万9千円	5,877円
野田村 (5,181人)	3,987万9千円	7,697円
久慈広域 (69,314人)	7億80万6千円	10,110円

※人口は平成18年3月末

発砲トレーやレジ袋、ビニール類、庭木などであふれるごみの山＝久慈地区清掃センターごみ焼却場

なぜ、こんなに増えたのか?

1980年以降、二酸化炭素の排出によるオゾン層の破壊、酸性雨などの地球温暖化が懸念され、地球上の各地で異常気象が発生し深刻さを増しています。

限りある地球環境の破壊をもたらしているその原因の一つは、先進国や発展途上国の経済がもたらしている「大量生産→大量消費→大量廃棄」というサイクルです。

戦後の経済発展によって、わたしたちの生活水準は大きく向上しました。しかし一方で、使い捨てが当たり前という風潮が広がりました。紙コップや皿、使い捨てカメラ、発泡トレーやレジ袋など、今では生活にかかせないモノとなっています。それらはごみとなり簡単に捨てられ焼却場や最終処分場などで、ごみの山となっている現状です。

深刻なごみ問題に直面する日本。久慈広域、そして村も例外ではありません。

「リサイクルできる資源ごみが焼却場に運ばれ、ごみに無駄なお金をかけている」と話す久慈地区清掃センターごみ焼却場の大湊米蔵さん

膨大な処理費 年間約7億円

久慈地区内のごみは久慈市、洋野町、野田村、普代村の4市町村が共同で運営する久慈広域行政事務組合で処理されています。

平成17年度に久慈地区清掃センターで処理されたごみの量は、広域全体で2万4828㌧、村のごみの量は、燃えるごみが705㌧、燃えないごみが92㌧、資源物が174㌧、合わせて971㌧となっています。

年間のごみ処理費(設備費や維持・管理費含む)は広域全体で7億80万6千円。村は2293万4千円、一人当たりは6903円となっています。しかし、人口約3300人から考えるとごみの全体量は少ないわけではありません。

久慈地区清掃センターごみ焼却場技術管理者の大湊米蔵さんはこう話します。「昭和63年に1万㌧だったごみは、平成18年には倍近くの1万9千㌧にもなっています。人口が減っているのにごみは増えています。皆さん廃棄物はお金がかからない『ただ』だと思っている人が多いです。

施設の維持だけでも電気代は月平均で280万円、焼却炉を冷やす水道代は月平均85万円かかっています。ごみが出れば出るほど焼却に時間とお金がかかります。そして、当然施設の老朽化も早まります」。

ダンボールなどの資源ごみが搬入される現状

久慈市夏井町にある久慈地区清掃センターごみ焼却場

焼却場改修になんと22億円

同焼却場は昭和61年に建てられ、建設費は約15億円。平成11年には人体に有害なダイオキシンの排出を抑えるためなどの改修費に22億円もかかっています。この金額は村の年間予算に等しい額です。

では、同焼却場に運ばれてくるごみに無駄はないのでしょうか。大湊さんは「資源ごみなのに段ボールや新聞、雑誌などが搬入されてきます。一人一人のモラルでしょうが、きちんと分別して持ってきてくれればいいんですが…。

仮に新しい焼却場を建てると70億、80億かかります。施設をできるだけ維持させるためにも、リサイクルできるものはきちんと分別してほしいです」と話していました。

わたしたちの生活から出るごみは、わたしたち自身が家庭に持ち込んだモノから生まれています。そのモノは限りある地球の資源からつくられています。

当たり前となったごみを捨てるという行為から膨大な費用をかけ処理されるごみ。それをわたしたちがきちんと分別し、リサイクルすることが大切だと感じました。